

## 巻頭言

## 日本発の新しい AI を目指す

山田 誠二

(国立情報学研究所, 総合研究大学院大学, 東京工業大学)



昨年の6月に人工知能学会副会長の任を承ったが、それ以来自分の学会に対する意識が変わってきたのを感じている。それまでの一会員としてお客様の立場から、いかに会員の方々に対して価値あるサービスを提供できるかを考えるようになった。そして、この年頭の巻頭言にあたり、日本のAI研究の方向性とそれに対する学会の貢献について考えてみたい。

まず、自己紹介がてらに研究経歴を振り返ると、博士課程のときは問題解決を効率化する機械学習を研究し、その後ベイジアンネットワークに類似した知識表現で確率的なプランニングの研究を始め、エージェント、ロボット、Webの研究に進展していった。そして、ここ10年は、人間とエージェントのインタラクシオンデザインを目的とするヒューマンエージェントインタラクシオンHAIを開拓してきた。現在は、HAIの概念を一般化した知的インタラクティブシステムの研究も始めている。こうして振り返ると、AIらしい研究から人間を含んだ系へと興味の変遷している。ただ、根底にはオリジナリティーがあり新研究分野の開拓につながる研究を目指しており、国際会議にまで発展したHAIは一定の成功をおさめたと考えている。

このような研究経歴を通じて感じてきたことは、日本のAI研究は新しい枠組みを提案する研究、強力なオリジナリティーで新研究分野を創出する研究がまだまだ少ないということである。実際、AI研究の研究トレンドは、ほとんどが欧米発である。そして、あえて厳しい言い方をさせていただければ、日本のAI研究はすでに流行っている研究トレンドを周回遅れで追いかけているという印象が拭えない。研究トレンドに対して賞賛されるのは、最初のオリジンに位置する研究であり、そのパイオニアの研究者であるため、日本のAI研究がそのような地位を獲得することは難しい。一方、AI以外の情報系では、例えばロボットの分野でIROS, RO-MANといった日本発で世界的にも広く認知された国際会議がいくつもあるので、AIの分野でもそのような動きがもっとあって然るべきだろう。

さて、そのような日本発の新しい研究分野を開拓するコアとなるAI研究、AIコミュニティ形成に対して、本学会が支援できることには何があるのだろうか。実はいくつかのシステムが利用可能である。まずは、全国大会のオーガナイズドセッション(OS)である。元来、OSとは、従来の研究分野に収まらない新しい研究分野が提案されるべきだと考える。この趣旨は、少数のコアコミュニティの形成とそのメンバによる初期段階の新研究分野の議論に適している。ちなみに、筆者は本年の全国大会の大会委員長を務めるが、参加者の皆様にも、ぜひ新研究分野を育てようという意識をもってOSに参加していただけると幸いである。さらに、本学会には、比較的制約の少ない第2, 3種研究会があり、新研究会を立ち上げて、OSで固まってきたコミュニティの拡大とそこでの議論をさらに発展させることもできる。

そして、次に本学会が支援する国際シンポジウムJSAI-isAI (JSAI International Symposia on AI)<sup>\*1</sup>である。JSAI-isAIでは、プロシーディングス関係や事務処理について学会の担当理事が中心となって手厚い支援を行っており、またプロポーザル採択の間口を広く保っている。そのため、メジャーな国際会議でワークショップをいきなり立ち上げるよりも敷居が低い。このJSAI-isAIをOSから国際化に向けての最初のステップとしてぜひ利用していただきたい。また、第2, 3種研究会を経て、JSAI-isAIのワークショップに至る道筋も歓迎されている。JSAI-isAIからよりメジャーな国際ワークショップ、さらには国際会議へと発展していただきたい。

以上、日本のAI研究の世界レベルでの地位の向上のために最重要と考えている日本発のAI研究について私見を述べた。また、現実的には、研究トレンドを追う研究も必要だろう。周回遅れではトップに立つのは難しいので、少なくともワークショップレベルで参入する必要があると思う。

\*1 <https://www.ai-gakkai.or.jp/isai/>